

NPO法人3keys

身近に潜む子どもの貧困問題

学習ボランティアなどの支援機会を提供

日本の教育には現状数多くの問題が存在し、様々な議論が交わされている。今回取材を行ったNPO法人「3keys」では、そういったなかで子どもたちの貧困問題に取り組んでいる。3keysという名前が、「きつかけ、きづき、きぼう」という3つのキーワードにちなんでおり、子どもたちが自分の可能性に気づき、未来に希望を抱くきっかけになればという思いが込められている。私たちにとってNPO



▲3keys代表の森山さん(左)と学生事務局インターン(右)

1人の子供が貧困を抱えている。さらに昨今では、コミュニケーション能力や、高水準の教育を受けてきたこと、パソコンを始めとする様々な技能が就職に求められてきている。そういった中で、きちんとした教育を受けられなかった人が就職先を見つけないのは容易ではなく、したがって貧困層とそうでない層との格差は年々広がり、またそうした状況の中で、両者の関わりはますます少なくなってきたというのが現状である。

このような耳を塞ぎたくなるような悲惨な状況の中でも、本当に耳を塞いでしまつて良いはずがなく、こういった現状全てを一度に変えることはできないが、できることを一つずつやっていくことが社会を変えることに

繋がる、と3keys代表の森山さん(左)は語る。3keysでは、そういった子どもたちに学習環境を提供すべく、学習ボランティアを募集している。学習ボランティアは、社会問題の解決に自分のできる範囲で貢献でき、また子どもたちの現状や教育について学ぶことのできる良き場である。さらに将来教員になることを考えている学生にとつては、大人数で教育を行う学校では分からない、子どもたち一人一人の事情が見えてくることも非常に勉強になるだろう。

人はたとえ慈悲深くとも、無知ゆえに何かを傷つけてしまうことが多々ある。そういうことが起こらないためにも、多くを学ばなくてはならず、3keysではそうした理解の手助けのために、子どもたちの現状を伝える講演会なども行っている。また募金については、社会人なりたての独身男性などが積極的に取り組んでいるそうだ。確かに社会人になった後、親に頼るという活動を行うのは素晴らしいことである。みなさんにも、就職した際に思い出ししてほしい。さらに、お金も時間もない人でも書籍の寄付を行うことができ、なかには学園祭で書籍を集め、寄付を行っている大学もあるそうだ。

3keysは、全ての子どもたちに児童憲章に書かれている子どもの権利が保証されている世の中を目指している。児童憲章というのは、子どもの権利宣言であり、もしこれが保証されれば、全ての子どもたちは所得や家庭環境に左右されず、

あなたの進路希望先に、ベンチャー企業という選択肢はあるだろうか。ベンチャー企業というものを詳しく知らずに、その選択肢を除外しているとすれば、それは非常にもったいないことかもしれない。そもそもベンチャー企業とはどういうものだろうか。そこで我々は、ベンチャー企業「株式会社幕末」(以下、幕末)人事担当の大野智之氏と、現在の卒業生であり、現在BtoBマーケティング事業部長を務める塩原慶大氏に取材を行った。幕末は15年前から「ベンチャー通信」を発行し、これまで数千ものベンチャー企業を取材している企業であり、日本のベンチャー企業に最も詳しい企業の一つと言える。その主な事業は、企業ブランディングを行い、企業の経営課題の解決をサポートすることである。

また社会を良い方向に変革するような良き人材となるためには、自分の理想と、それに人生をかける覚悟を持つことが必要だと言っている。幕末が「ベンチャー通信」を創刊した2000年頃は、DeNAやサイバーエージェントといったITベンチャーが多かった時代であった。そういった時代の中で、若い力で社会を変えていくという人たちが、もつと多くの人に知ってもらいたいという思いが生まれ、「ベンチャー通信」を創刊、そして2005年に幕末を設立された。リスクを負ってでも夢を追いかけ、なかを成し遂げようとする若い人が、世の中に変革を起こし社会を進ませたい。そういった起業家が、まるで幕末の維新志士のよう

に活躍する時代の到来である。確かに今、時代は転換期にきている。高度経済成長期からバブル期、失われた20年を経て、今までは全く異なった状況、時代が到来してきている。これから先どんな時代が来るのか、それを決めるのは時代を切り拓き、社会に変革を起こそうとする志士達ではないか。大野氏は、そういった変革を起こす人たちが生まれる社会にしたいと語る。

「就活にベンチャー企業という選択肢も」

株式会社 幕末の人事担当者にインタビュー

幕末(以下、幕末)人事担当の大野智之氏と、現在の卒業生であり、現在BtoBマーケティング事業部長を務める塩原慶大氏に取材を行った。幕末は15年前から「ベンチャー通信」を発行し、これまで数千ものベンチャー企業を取材している企業であり、日本のベンチャー企業に最も詳しい企業の一つと言える。その主な事業は、企業ブランディングを行い、企業の経営課題の解決をサポートすることである。



大野氏のアドレス: t-ono@bakumatsu.co.jp

▲左:塩原氏 右:大野氏

また社会を良い方向に変革するような良き人材となるためには、自分の理想と、それに人生をかける覚悟を持つことが必要だと言っている。幕末が「ベンチャー通信」を創刊した2000年頃は、DeNAやサイバーエージェントといったITベンチャーが多かった時代であった。そういった時代の中で、若い力で社会を変えていくという人たちが、もつと多くの人に知ってもらいたいという思いが生まれ、「ベンチャー通信」を創刊、そして2005年に幕末を設立された。リスクを負ってでも夢を追いかけ、なかを成し遂げようとする若い人が、世の中に変革を起こし社会を進ませたい。そういった起業家が、まるで幕末の維新志士のよう

に活躍する時代の到来である。確かに今、時代は転換期にきている。高度経済成長期からバブル期、失われた20年を経て、今までは全く異なった状況、時代が到来してきている。これから先どんな時代が来るのか、それを決めるのは時代を切り拓き、社会に変革を起こそうとする志士達ではないか。大野氏は、そういった変革を起こす人たちが生まれる社会にしたいと語る。

本で紹介 若者に武器としての教養を 星海社新書シリーズ



▲星海社新書のシリーズ

当然のことではあるが、止まることなく時を刻み続けるこの世界において、社会や時代を含め変化しないものは存在しない。しかし、来るべき時代の姿とどのようなものだろうか。それを決めるのはこれからの世界に生きる我々であると言えよう。「みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていきたい。若い力で、世界を変えていきたいのです。」とは、星海社新書の理念の一部である。今回皆さんにおすすみたいのがこの星海社新書であり、この新書の目的は「戦うことを選んだ次世代の仲間たちに武器としての教養をくばること」だ。我々が未来を切り拓くためには、多くのことを知らなければならず、また時には現行の社会と対立することも必要になる。そういった中で必要になってくるのが、「武器としての教養」である。例えば同新書の「武器としての交渉思考」は、交渉とその勝ち方について書かれた文字通り戦うための教養だ。さらにこの本では交渉とはコミュニケーションであり、また単純に一方が勝ち他方が負けるといった類のものではなく、双方が共に新たな未来へ向かうためのプロセスであると言っている。他にも「中身化する社会」では、インターネットが普及し多くの情報が飛び交う現代において、うわべだけのものは直ぐに見破られるようになってきたと言っている。したがって、より物事や人間の中身が重要になってくる。つまりこれらによって、これからはごまかしが効かない一方で、浅薄なものや非人道的なものにより認められない社会になると考えられる。しかし同時に、インターネットという不特定多数の人が会し、匿名性のある領域のなかで、人々が集団浅慮に陥る可能性も無視できない。このことは、これからの社会ではますます我々一人ひとりがしつかりと意思を持ち、同時にこの社会に対して真摯であることが重要になってくるのではないだろうか。

この他にも数多くのタイトルが出版されている。同シリーズの各書には、未来への希望とその未来を担う者としての著者の覚悟が随所に現れている。これらを読むことで、希望と勇気と、そして未来を担うチームとしての若い世代の心強さを感じることができよう。

3keys
~きつかけ・きづき・きぼう~

**3keysでは、
学習ボランティア
活動支援者を
募集中です。**

詳しくは で検索。